《郷土史への扉》

霧島つつじと龍馬

「霧島」を早くに世に広めたものがあります。それは皆さんもよくご存じの民謡「おはら節」です。

歌詞に「花は霧島、たばこは国分、燃えて上がるはオハラハー桜島」とありますが、この唄ほど、鹿児島を代表する民謡はないのでは。

「おはら節」は県外の人には「たばこは国分」の文句の方が通りがよく、冒頭の「花は霧島」は印象が薄いかもしれません。「花」といえば一般には「桜」を指しますが、しかし、おはら節の「花」を桜と思い霧島を想像したら、それはちょっと違います。霧島の花は「霧島つつじ」を指しています。

この「霧島つつじ」の美しさは、坂本龍馬も感嘆したほど。龍馬は慶応二年（一八六六）三月に妻のお龍と鹿児島を訪れ、二人で高千穂に登っています。

龍馬は高千穂登山の様子を、姉の乙女様に絵入りの手紙で詳しく知らせています。その手紙を読むと、龍馬は細かい心配りをする人だったことがよく分かります。

文中に高千穂の姿を描き、山頂には天の逆矛（さかほこ）も描き入れています。登ってきたコースは朱で線まで引かれ、横には細かい字で詳しい注釈を入れ、天の逆矛の所には二人でエイヤと引きぬき、また元のとおりにおさめたと書いてあります。龍馬の自由な精神がよく現れています。

また、その下に点々を打ち「此処きり島ツツジ　ヲビタダシクアル」ともあり、本文には「なる程きり島つつじが一面に生えて実（まこと）つくり立てし如くきれいなり」と感激したことが記されています。

文中に「なる程」と書いているところをみると、高千穂登山をすすめた西郷隆盛や小松帯刀（こまつたてわき）などから、事前にその見事さを聞かされていたようです。

実は、この絵入りの手紙は、龍馬の独創かと思われていましたが、彼らより前に、高千穂登山をして紀行文を書いた人がいます。

その人の名は伊東凌舎（いとうりょうしゃ）。江戸の講釈師で、島津斉興（なりおき）の供回りとして天保六年（一八三五）鹿児島に来て翌七年まで滞在、藩内をあちこち見聞して回りました。伊東は七年七月二十三日から二十九日まで高千穂登山などをして過ごしています。その間のことを好奇心あふれる書き振りで旅行記にして残しました。

この旅行記は『鹿児島ぶり』といわれています。感心なのは文章だけでなくスケッチを添えていること。絵はけっして上手とはいえませんが、情景を理解するのに非常に役立ちます。

伊東は鹿児島から吉野、白銀坂、加治木、小浜と陸路で来て、宮内の正八幡（しょうはちまん）に参拝し、日当山から水天渕の宮内原用水記念碑を訪れ、安楽温泉へ。それから犬飼滝、かせきの原を経て高千穂に登っています。もちろん道中スケッチをしながら。高千穂でも山の姿に自分が登ったコースを示し、頂上には天の逆矛も描いてます。

龍馬は、高千穂に登る前に、この道中記を読んでいたに違いありません。西郷などが提供したのでしょう。

伊藤の高千穂登山は、龍馬が登る約三十年前のこと。伊東がたどったコースを龍馬も通った可能性が高く、面白いのは、伊藤も龍馬も自分が登った山を「高千穂」と言わず、「霧島」と呼んでいるところ。高千穂は『古事記』『日本書紀』に出てくる古い名称なのに、当時は一般に高千穂、霧島の区別はせず、あの辺りを霧島と総称していたのかもしれません。

市長コラム　前田終止

創造する市役所へ

市長の立場でよく取材されるが、広報広聴課を逆に取材してみた。今回、広報誌のリニューアルは、市の職員2名がボランティアで協力していた。霧島市の未来を考えるとき、そのような姿勢はとても重要でありがたい。市職員として、自ら仕事を創造できるようになってほしいし、市役所全体の企画力・政策遂行力をアップしてほしい。「合併したばかりの今、これまでと同じでは地域がもたない」という意識を職員がもつことが大切だ。新しい企画をどんどん発案し、実行していく実働部隊、汗をかく集団として問題点を解決できる役所づくりを進めたい。

私も先頭に立って、市民の皆さんに語りかけようと考え「市長と語イもんそ会」と「市長とランチで語イもんそ会」を展開している。市民の皆さんの意見を聴くことが、今後、とても重要だと判断したからだ。皆さんから出された意見で知らないことがあったときは、公務の合間を縫って、必ず現場に出向き確認している。このような体験で得るものは、私にとって大きな財産になると考えている。市長自らが先頭に立って、元気よく頑張っていきたい。